慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大内氏の文化(中)
Sub Title	
Author	伊木, 壽一(Igi, Hisaichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.1(161)- 22(182)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學　第貳卷　第貳號　大正十二年二月

大內氏の文化（中）

五　經學詩文

大內氏の經學詩文は主として公家禪僧との關係及び支那朝鮮との交通に因るものである。就中僧侶の影響は最も大なるものがあつた。大內氏の盛時、卽ち南北朝前後より戰國時代に至る我が國の漢文學は、殆ど京都五山の禪林にのみ傳はり、所謂五山文學として今に賞讃せらるゝところである。當時此等の禪刹よりは幾多の名僧智識が輩出して、或は經學詩文の研究に、或は內治外交の輔佐に任じたるが、彼等は多く大陸にも往復して、彼の土の新學風を傳來し、我が漢文學上貢獻するところ大なるものがあつたのみならず、その學問は更に地方にも波及して、到る處漢文學は釋氏の掌中にあつたのである。大內氏は歷代好學なりしが上に、海外交通の關門を扼し、且つ多くは京師に出でゝ在留せる

を以て、大陸往來の學僧や五山十刹の巨匠との接觸も自から他に異るものがあり、隨つてその城邑たる山口を中心として、禪林の學風は可なり盛んに興隆せられた。

夙く弘幸は南禪寺の規菴祖圓（南院國師）の法弟鏡空淨心に道契を結んで、乘福寺を建立し、その子弘世は周防高山寺の基山賢仙（照覺普濟禪師）幷に天龍寺の石屏子介（佛宗眞悟禪師）に歸依し、爲に數寺を創して演說の道場とした。此等の禪僧は何れも當時有數の碩學たれば、必ずや悟道修禪の外に、漢文儒學の師匠ともなつたことであらう。殊に石屏子介は建長寺靈山道隱の弟子にて、嘗て元に入り、歸朝の後名聲大いに揚がれるを以て、深く弘世の尊信を受け、山口香積寺の開山となりて、寺內の金鼇庵に住したりしが、後また京都天龍寺に出世した。その如何に當代に重きをなしたりしかは、有名なる南禪寺の春屋妙葩（普明國師）をして「師若不起、吾道竟如何也」（○山口宮野村常榮寺所藏妙葩尺牘）とまで言はしめしを以ても知らるゝが、詩文に於てまた拔羣の巨匠たりしこと、その遺稿によりて察せられる。萩町の郊外椿鄕なる古刹龍藏寺所傳の偈の如き、その一斑を窺ふに足るであらう。その偈に曰く、

只今方々一丈中、等閑把定不通風、縱饒喚詰逞神力、三萬猊林無處容、　戊午仲春石屏印印

此等僧侶の外に注意すべきは、弘世の時に當つて明人趙秩（可庸）なる者の山口に來つたといふ事である。趙可庸は我が建德元年（明太祖洪武三年）倭寇禁遏を求めんがために九州征西府に來れる明使であるが、それより如何にして山口に來れるかは明かでない。さりながら今に至るまでも山口地方には往々その事蹟を傳へ、世にその作と稱せらるゝ山口十境の詩といふものがある。

長谷晴嵐

非煙非霧翠光迷、谷口雲連日影低、都道嵯峨山色似、依稀疑是陽雒西、

清水晩鐘

暮雲疎雨欲消魂、獨立西風半掩門、大内峯頭清水寺、鐘聲驚客幾黄昏、

氷上滌暑

光凝山罅銀千疊、寒色清人絶鬱蒸、異國更無河朔飲、煩襟每憶玉稜層、

南明秋興

金玉樓臺擁翠微、南山秋色兩交輝、西風落葉雲門靜、暮雨欲來僧未歸、

象頭積雪

夜來積雪象頭峯、老却溪山變玉龍、便欲乘龍朝帝闕、瑤階瓊宇更重々、

猿林曉月

曉色初分天雨霜、凄々殘月伴琳琅、山人一去無消息、驚起哀猿空斷腸、

虹橋跨水

盤浸甃玉接東流、鞭石尋仙興未休、借得紫虹飛欲去、扶桑何處是三洲、

梅峯飛瀑

銀河誰挽玉龍翔、白練懸岸百尺長、噴向梅梢雨花落、濺人珠玉帶清香、

（湯田溫泉）

山川秀朶陰陽灰、天地鑄成造化鑪、誰獻玉鷗天室後、泒分春色到東隅、

鰐石生雲

禹門點額不成龍、玉立溪流任激衝、自是烟霧釣鰲處、幾重苔蘚白雲封、

また毛利公爵家所藏に玉庭吟といふものもある。

龍海雲禪師愛余之篤、臨行大內不及別、客舍博多、珉上人謁余、乃雲師之徒也、請余以玉庭唫、余推愛屋及烏之意、遂詠焉、

玉庭吟

橫岳生珉玉作庭、雲吹五色耀防城、瓊林得志都儒遇、嘉樹成陰謝氏榮、梅月窓前爭獨秀、芝蘭階下鬪群英、爾來惱客吟詩苦、玉骨淸人太瘦生、　囓雪老人趙可庸印印印

是はその引にある如く、可庸が大內氏に行ける際の詠であるが、尙ほ彼の妙葩の遺稿雲門一曲の序跋は可庸が山口に在りての作といふことである。是を以て之を觀れば、可庸の山口に來れることは疑なきが如く、その詩文は大內文學の先驅をなして、後世に影響するところ尠からざるものがあつた。

尋いで義弘に至つては、五山文學の盛時に當れるに、其身も幕府の元勳として多く在京し、且つ好學の資を有したれば、當時詩文に於て禪門第一流の大家たる天龍寺の絕海中津に師事して居た。絕海の五山文學史上に於ける地位は、今更喋々するまでもない、その義弘との關係は、應永の亂に絕海自ら堺に下つて降を勸めしを以ても知られるであらう。義弘はまた春屋妙葩を景仰し、請じて岩國永興寺の開山としたが、尙ほ加賀大乘寺の徹山旨廓の法嗣たる慶屋定紹にも歸依し、領內吉敷郡小鯖村鯖山に法幢山禪昌寺を建立して、その開山とした。禪昌寺記に據れば、定紹の作として頌山十境の詩と

いふものがあるが、また左の一詩もその作として傳らるゝ。

正月元日祝聖上堂

雪消東嶺笑顏開、霞簇南山賀暖來、特地改觀獅子頭、風雲七百擬黃梅、○獅子頭は鯖山山の巖石の名

されば義弘は必ずやこの方面に於ても多少その才能を現せるならんが、未だ歌文に於けるが如き著明の事實は見當らぬ。或は近藤翁の云へるが如く、彼の高麗の使者韓國柱を送らしめし朴居士が、吉野朝廷に仕へて文學古今に通じたりし朴翁遊和軒昨木子なりとすれば、多少の面白味も加はらぬではないが、是は猶ほ研究を要することである。

然るに盛見に至つては、顯著なる修禪の事實に伴つて、詩文に關する事蹟も亦見るべきものが少くない。彼はその治城の邊に勝地を卜して碧山別墅を營み、公衙僅に罷めば、便ち此處に山僧野客と相會して、禪を語り燕を樂みつゝ、塵務を忘れたるが如くであつたといふことで、その間定めし詩作句案の樂みもあつたであらうが、更にこの別墅に題する詩篇を五山の元老碩師に求め、その詩軸の跋を南禪寺の惟肖得巖に乞うて作らしめた。碧山の別業は今その位置不明であるが、得巖の後序はその文集東海瓊華集中に見えて居る。

防之州治曰大內、山環水澈、最爲勝絕、五馬之選、多多良氏、一姓蟬聯、祖孫相望、以生於斯、老於斯、有年於斯、故稱大內公、則不問名氏、人知其家、猶唐人稱曲江焉、今太守大先居士、智勇超其父兄、聲稱籍甚朝右、隱然一外屏也、然而雅抱淸高、神恬澹漠、治城旁占要規地、以置碧山別墅、公衙僅罷、便携山僧野客、以禪以燕、若塵務不經于心者、京城禪苑元老碩師、聞而歎之

曰、方功名富貴鼎來、而翛然從事方外之樂、非識見出常人、則何以臻茲、（下略）

所謂元老碩師の詩篇の一例としては、相國寺第十九世愕隱惠羲の南游稿中に左の一篇がある。

題大內公碧山別墅

人道邦君有古風、閑遊往往與僧同、白雲丹壑功名外、異草靈禽政化中、每向國清尋苦行、何勞香積展神通、幾時一錫凌空去、山水幽邊占一叢、

瓊華集中なる「碧山佳處」の七律も亦この類例と思はれる。尙ほ同集中の「飛泉亭詩後序」「蓬月亭詩序」に據れば、盛見は京都の邸內に飛泉蓬月の二亭を營み、主客相會して詩歌の樂を共にし、諸老の詩篇成るや、得巖またその序跋を加へて居る。得巖は盛見の最も信仰せる善智識で、當時天下に名高き方豪であつた。その著述に莊子鬳齋口義鈔・東海瓊華集などあり、殊に瓊華集には前述の外、大內氏關係の記事が少くない。併し最も注目すべき大文字は盛見の法號大先說である。大先は至大至先の略で、彼の絕海中津と共に二甘露門と稱せられし天龍寺の空谷明應（常光國師）より授與せるところ、得巖需によつてその說を書いたのであるが、今その銘文のみを揭げ、以て全豹を窺ふの便りとして置く。

華藏無盡、可量其邊、須彌百億、可窮其巔、覺性之大、物莫加焉、胚胎萬象、爲天地先、證而知者、爲聖爲賢、區々小知、醯鷄甕天、譬彼牧羊、視後以鞭、惟　大內公、繇武入禪、恢擴無外、凌厲無前、三昧正受、塵々皆然、　常光二字、重靑瑤鐫、　公帶此号、千萬斯年、伊余鈍吻、其義難宣、英匠林立、盍就求旃、

この大先に就いても盛見は五山の碩學等にその偈を求めたものと見え、相國寺雲松軒の𤔲基西胤俊承

の遺稿眞愚稿中に左の一偈が存して居る。

防州太守德雄居士、別稱大先、賦拙偈以塞其請云、

天地何曾較等倫、威音劫外獨抽身、小根小智小機巧、一々看來落後人、

右の說偈に據りて見るも、所謂大先の法號は單に儒敎の說のみならず、佛老の思想に本づけるものなるべく、當時五山の禪叢に萌え出でし朱子學の影響に因るところであらう。隨つて、盛見の儒學に於ける智識が、單なる辭句のみならずして、宗敎哲學の上に立脚せることが察せられるであらう。是はその修禪の事實より觀て當然の歸結と云ふべきである。

尙ほ盛見は文名一世に喧しかりし天龍寺の無求周伸に參すること久しく、一日師の壽容を畫き來つて賛を求めしに對し、無求の自賛は次の如きものであつた。

予今八十益頑囂、土木形骸咲倒人、大先獨愛醜陋甚、五彩畫成面目新、

盛見はまた臨濟禪のみならず、曹洞禪をも修め、石屋眞梁を尊信して、爲に小鯖村に月光山闕雲寺を創建して開山とし、その弟子覺隱永本にも歸依したれば、此等の諸名衲もまた文學上に影響を與へたことゝ思はれる。

啻に僧侶の輩のみならず、公家との關係もないではない。應永十一年二月氷上山興隆寺本堂落成の供養會を嚴修せる時盛見の捧げし願文は、關係緇徒の作にあらずして、在京搢紳の手に成つたものである。即ち草案は三條少納言の作、淸書は三條右大臣の筆で、「云筆者、云作者、驚耳目畢、」（興隆寺大堂供養日記）と稱せられたる程ありて、可なり見事な漢文である。此の如く公家や僧侶との關係はありながら、盛

見自らの作として傳はれるものは、不幸にして未だ管見に入らぬ。

盛見の弟持世は、和歌を以ては一世に鳴りしも、經詩の方面は殆ど知られぬ。次の敎弘は臨濟禪りも寧ろ曹洞禪を好み、父盛見の歸依せし石屋眞梁の高足たる覺隱永本に師事し、覺隱をして己が壽像の賛を作らしめた。その賛は

外現宰官相、內探敎外宗、儀形兮落々、德宇兮雄々、蒞事於四州、勸善懲惡、加威於九土、則易俗移風、咦不忘昔日靈山囑、來顯法門榮衞功、

また寛正五年細川勝元の命を以て關西に使せる東福寺栗棘庵の僧惠鳳翱藏司の著述竹居清事にも、敎弘の壽像に題せる賛がある。

題大內公壽像　并序

今防城侯、西藩諸鎭受其節度、而動於其指呼、四境風靡、來庭於治下者、海朝雲歸、甲申（寛正五年）之冬、予寓錫於城中之古刹、其屬吏藤氏忠勝披幅楮而進焉、曰吾泳我侯之化、飲我侯之德、輙肖我侯之壽容如何、仍題之於其上云、

意氣凜然橫九州、倒戈來者順如流、只將曩祖貽餘烈、克俾兒孫榮不休、

尙ほ一書中には、築山邸內の飛松の記を始め、相良淳朴翁（正任）・楊雲谷（雪舟）その他の名士巨匠等に關する記說多々これあり、以て敎弘治下の文敎を觀察するに足るのであるが、殊に顯族吉田氏の齋に題せる蕉齋記中に「今吉田氏不啻器伏報於國知、時讀書操經、遊性情於閑靜之地」とあるが如き、また氷上別當の亭に題せる幽谷亭記中に「防之氷上、乃臺衡宗之名寺也、碩學偉人、不媿其寺者、歷世競頭而出、

僧都眞源公、乃寺之宿望、邑之高流、以幽谷扁其所寓、」とあるが如き、何れも經詩に關する一班を窺ふべきものであらう。

教弘はまたその部將鷲頭弘忠の師資の禮を執りし、長州深川大寧寺の竹居正猷にも歸依し、その示寂に當りては、急遽自ら候問せりとの傳へさへある。竹居は同じく石屋の法弟で、また彼の惟肖得巖にも師事し、博多の福昌寺●能登の總持寺等に歷住したが、弘忠の屈請に應じて大寧寺を董し、德望一世に高きものがあつた。その文才を窺ふに足るべきものは、石屋眞梁塔銘覺隱永本肖像賛などがあるが、玆に尙ほ注意すべきは、前關東管領上杉憲實との關係である。憲實はその主足利持氏と衝突を生じ、持氏滅後は剃髮して諸國を巡錫して居たが、竹居の德風を慕ひて大寧寺に來り、寺內に庵を結んで槎留軒と名付け、文正元年閏二月六日この處に終つたといふことである。○隆涼軒日錄、鎌倉大草紙、長防風土記等、憲實は人も知る如く、戰國怨劇の間に處しながら、足利學校の再興を始め、我が學問史上に最も顯著なる事蹟を遺したるが、斯かる名門好學の士が來つてその終焉を託したことは、獨り竹居の學德を知るに足るのみならず、また以て大內氏の文學を語る上に記念すべきことゝ思ふ。況や教弘の竹居を候問せる時、親しく槎留軒に於て憲實と對談せることさへ傳ふるに於ておや。縱令それが大草紙などに云ふが如く、大內氏年來の目的たる天下の後見たらんがために、憲實の來託を幸に、馳走渴仰して、その養子となり、上杉山ノ內の系圖を繼ぎ、篠ノ丸に舞雀の幕の紋を請ひ受けしとまでは斷定し難しとは云へ、教弘を始め、大內氏の上下に對し、殊に文學上有形無形の影響を與へしことは想像するに難くない。

教弘に嗣ぎし政弘は、前述の如く和歌連歌に於ては不朽の名を留めたるが、漢學に關する事蹟は、

肥後の菊池重朝、薩摩の島津忠昌と相并びて儒學を好みしことを傳ふるにかゝはらず、今多くを知ることができぬ。帝室御物御註孝經の奥書に

後小松院御讀書之始、吾高祖父後押小路內府公忠奉書進之本也、先考後三條入道左府禪空○實量　不慮相傳、以所付予也、今與龜童公○大內義興、以令知孝者德之本也、

文明十八姑洗下浣日　桑門祥空○三條公敦

此本、龍翔院右府○公敦　防州下向之日被隨身之、予記往事、以便風求之、則書寫畢、於本者、返送彼國者也、

享祿辛卯後五月下澣　苾芻堯空○三條西實隆

右件之端一兩枚有點、予覓他本、加朱墨兩點了、（三條西）于時天文第三六月十六日、凌炎蒸終功了、　都督則公條

とある。○史料編纂掛寫眞に據る　この奥書に據れば、政弘と親交あり、之を賴りて周防に下向せる三條公敦が、その父實量より相傳せる御註孝經を、政弘の嫡子龜童丸即ち後の義興に與へて、孝道の一助としたものを、その後三條西實隆之を借寫して、本書は周防に送り返したことが知られる。されば公敦の如きは、啻に歌文の誘掖のみならず、經詩の指導にもまた任じたものである。

此の如き敎育を受けた義興は、管領代として久しく在京せるを以て、五山との關係も隨つて深かつた。殊に當時天下第一の才筆と稱せられし南禪寺の景徐周麟と交厚く、周麟爲にその甲冑壽像の賛を書いて居る。中に

蓋夫祖考之美譽係乎子孫之英賢、頻升四位三品、寵越一日九遷、風塵三尺、社稷一戒、威振夷夏、

壽考萬年、本支百世、化行山川、舜何人也、禹無間然、

と云へるは、聊か過褒の嫌なきにあらねど、簡潔なる語句巧に義興一生の事業德化を示せるところ、流石に大家の手際である。この賛は永正八年十月のもので、周麟の遺稿翰林葫蘆集中に見えたるが、尙ほ同集中には「周防路上方山香積禪寺鑄鐘疏」「周防路香山國清旌忠禪寺鐘銘」等、義興の需に應じて書ける文もあり、兩者の關係を推察するに足るものがある。

次に最後の義隆に至つては、廣く和漢の學を修め、經學詩文の方面に於ても、大內氏空前の事蹟を遺した。この時に當り搢紳緇徒の來り託する者最も多く、好學なる義隆は、勿論此等の人々に就いて經詩も學習したのである。即ち大外記淸原賴賢枝賢を招聘して、妻の實父官務小槻伊治と共に己が儒學の師と憑んだ。當時朝廷に於ける明經道は淸原氏の手に在り、その奉ずるところは主として訓詁の學即ち古學であつて、朱子の新註とは別であつた。賴賢の祖父にして當代に最も重きをなせる環翠軒宣賢の如きすら、五經及び論孟は古註に據り、唯僅に大學中庸にのみ朱註を用ひたるを以ても知るべきである。されば義隆が賴賢・伊治等より學び得たところも亦それであつたであらう。兎角相當の素養も出來しなるべく、天文十五年春よりは、柳原大納言資定・持明院左衛門督基規一忍軒・竹田法眼定慶及び神光寺の僧某等と共に經書の輪講を始めて、疑義を賴賢・伊治に質したることあり、また自ら四書五經を講じて、近習小座敷衆に聽かしめたこともある。多少は所謂天狗の氣味もあつたであらう。殊に彼の環翠軒宣賢の著四書五經諺解を錢五萬疋を贈つて借寫せることの如きに至つては、その熱心の程見るべきである。彼が「面目之至」として奉獻せる即位の資さへ二十萬疋に過ぎざるに、縱令碩學泰斗の著

とは云へ、一書籍の轉寫に五萬疋を投じて惜まざるとは、流石に義隆ならでは能はぬことゝ思はれる。

義隆はまた公家の外にも大德寺の玉堂宗條を招き下して龍福寺に主たらしめ、參學の師として崇敬したが、天文十三年三月、請うて己が壽像の賛を書かしめた。その賛は

工夫堅確、意氣凛然、頓會言下無多子、即信教外有別傳、劃破圓相、截斷陳操、脚跟下吸盡江水、併劫庵薀口皮邊、呼爲法社宰官、則活機戰將、喚作在家菩薩、則大用現前、不恁麼不恁麼、地是地、天是天、

三品大瞻宗雄大居士、扣山野寂寞之濱、究明三玄密旨、其志無怠者也、一日寫于形質、需賛辭、書以塞請云、

天文拾三祀季春下澣日

前大德玉堂叟宗條

といふので、大内氏實錄土代に萩妙悟寺藏として載せてあり、島根縣益田町楯氏所藏の義隆畫像にもまた之と同樣の賛がある。但し、楯氏所藏のもの、賛には「三品大瞻宗雄」の代りに「二品瑞雲珠天」とあり、且つ全文の次に「星霜之久、裱上蠹汚、今茲寛政紀元己酉　十二月、新加裝飾、以傳不朽　冷泉判官隆豊十一世孫六郎右衞門道豊謹識」と誌されてある。こゝに「二品瑞雲珠天」とあるは、本は「三品大瞻宗雄」なりしを、寛政修補の際改めたものであるまいか。そは義隆　從二位に敍せられたるは天文十七年のことで、十三年には猶ほ從三位であり、また「瑞雲珠天」の法號は義隆の最後に大寧寺異雲より附與せしものなるを以ても知るべきであらう。

その他前述の天台・眞言の碩德も義隆の儒學に關係なしとは云ふを得ず、異本義隆記に、諸寺の新發意の器用を選んで本寺本山に遊學せしめしことを云へるも、また有り勝ちの事であつたと思はれる。

義隆はまた海外交通を利用して、經籍佛典を求めて居る。否寧ろこれがその交通の一大目的であつ

たであらう。佛典經文の將來は、既に義弘・盛見等に於てその先例あることなるが、義隆に至つては更に儒書經籍の請求をもなしたのである。即ち天文三年の春、使を朝鮮に遣して五經正義五經大全等を請へるに、彼の國よりその書を寺額と共に回使に付して贈れること、嘉靖十八年九月朝鮮國曹判姜顯より義隆への答書に見えて居る。また天文七年十月には、義隆より五經大全各一部幷に佛盧僧房の榜額受領の謝辭を陳べ、更に朱氏新註の五經を求めたるが、その疏に「抑亦如朱氏新註五經、上古弊邦諸儒蓄之者、家々汗牛、戸々充棟、而近世一秦、殆成坑灰、其僅存者、散亂毀裂、十亡四五、僕爲書生學官、病之甚至、伏乞憐察、」と云へるは、誇張の言辭を弄したる嫌なきにあらねど、彼自ら書生學官を以て任じ、舊き訓詁の學に甘せずして、新しき學說を求むるに汲々たりし樣を窺ふに足るであらう。されば之に對して嘉靖二十年正月朝鮮國禮曹參判任權より與へし答書にも、「可見足下向道之切、慕學之篤、不覺敬嘆、」と云つて居る。强ちお世辭ばかりではあるまいと思ふ。併しこの時には、「今天下所尙而習學者、皆程傳易、胡傳春秋、蔡傳書、朱傳詩、陳註禮記、本國敎學所尙、亦不外此、別無朱氏新註、」といふ譯で、義隆の希望は達せられなかつたが、唯だ朱傳の詩書だけは好書の助として贈られて居る。續本朝通鑑天文十五年の條にこの事を記して、「然則義隆嗜經書、亦非今年初、素有其志者也、」と云へるは言ふまでもない。松下見林の異稱日本傳に、金安國の慕齋集を引き、右の答書を載せたるが、見林の案に「今按、大內氏好學、求五經新註幷漏刻器于朝鮮、其志可嘉尙矣、時朝鮮所用易則朱子本義、詩則朱子集傳、書則蔡沈傳、春秋則胡安國傳、雖中華不外於此也、禮記則鄭玄註、朝鮮未如有陳浩集說、(中略)先是永樂十三年、成祖文皇帝命儒臣、集諸家傳註、而爲五經大全、註則上所

列新註也、然未到于朝鮮、故金史所復如右、其後中華船梱載來于我、惜乎大內氏未及見之、」と述べたるも、大體に於て同感である。

義隆は更に明國とも交通し、天文八年には、筑前博多聖福寺の湖心碩鼎をして天龍寺の策彥周良以下數百人を率ゐて入明せしめ、尋いでまた天文十六年には、策彥を正使として遣して居る。此等の遣使は貿易を以て主とせるが如きも、同時に大內氏の學問上に影響ありしことは言ふまでもない。碩鼎の遺稿三脚稿、策彥の遺稿初渡集・再渡集等は、何れもこの間の消息を傳ふるものである。啻に學問のみならず、彼の國の茶飯の饗を眞似び、言語もまた華人に倣つたとさへ傳へられる。尙ほ實錄土代所收の明本書牘幷に策彥の跋に據れば、策彥在明中、六部尙書豐存齋の第を過り、その燕寢に於て、元の高僧中峯明本普應國師の虛室副使に復するの書牘を見、之を所望せるも得る能はず、事遂に止んで居たが、明年大明人五峯先生といふ者、之を帶し來つて義隆に獻じた。義隆乃ち之を策彥に與へ、策彥更に方外の友夕庵に贈つたといふことである。この尺牘は、文章の美もさることながら、「字劃龍跳虎臥、決非凡緇俗儒之所及」てふ名蹟であつた。五峯の之を將來して義隆に上れるは、その翰墨を好めるを承知せるが爲であらう。彼と云ひ是と云ひ、義隆の漢學に附帶せる事實と觀てよからうと思ふ。因に、義隆の書は實に當代武將中の名筆である。その眞蹟は前揭赤間宮所藏の短冊の外にも、相良家文書、前田家文書等、諸方に多少現存するが、五山の風に上代樣を加へたるが如く、雄渾流麗、恰も岳父小槻官務伊治の書風に似て、更に出藍の面影がある。

そは兎も角も、義隆は、大陸の學問を吸收する上に於て、斯かる熱心を有したれば、支那朝鮮の人

としいへば、成る可く之を優遇して、儒學を始め、それぞれの道に彼等を利用した。天文年中平戸に漂流せりと傳へらるゝ明人張忠を召して、儒醫として任用せるが如き、その一例である。南海通紀所載、天文十六年二月廿日大內氏渡唐船法度條々の中にも、「一、進貢意趣、公儀等事、對唐人等不可及言語、同私筆談停止也、但到醫學儒學等練習者、非制之限事、」とある。以て義隆の特に儒學修業を重んぜしことが知らるゝであらう。序ながら、公爵毛利家に保存せらるゝと聞く孔子の畫像がある。宋の米芾の自畫自賛と稱せらるゝもので、絹本、着色、像の長五尺三寸許りといへば、頗る大幅であるが、上部の賛は「道具太極化、行々氣統合、羣聖參賛、天地删述垂、憲日星炳明、立我綱常、萬世作　程、元豐二年春日米芾印」とある。傳に據れば、この畫像は義隆の愛藏せしものゝよし、然らば義隆在世の日は、定めし釋奠講釋などの折には奉祀せられたことであらうが、滅亡の後は、家老內藤氏に傳はれるを、更に毛利家の有に歸し、毎年二月の釋菜には、藩學明倫館に貸下げられて居たといふことである。尚ほ長防風土記山口宰判には唐本屋內海氏に關する記事があり、「其ころ異國より來れる經史錦繡等京師諸州に通商せし時、內海某といへる商賈の家其の事に幹たりしこと、今の世の崎港五ケ所の宿老の如くにてありしとぞ、かゝる由緒あるものなるより、御當家より屋敷壹區を賜ふこと、先判の旨に任せらるゝよしなり、內海家は舶來の經史子集の事に關係せし商賈なるより、世相稱して唐本屋の名を呼り、」と見えて居る。即ち大內氏殊に義隆時代に於て多く輸入せられし儒書經籍類を扱へるより、斯く唐本屋と呼ばれたもので、當時山口の地に唐本の舶來少からず、啻に義隆の側近のみならず、一般にも多少行はれて居たことが想像せられる。勿論京師諸國へも通商したことであらう。

因に、この内海氏の家は山口町大市に在り、大内家滅亡の後毛利家の保護を受け來れることは、風土記に記す通りである。

次に義隆が特に詩作を好みしことは、所謂大内本の聚分韻略を板刻せしめたるを以ても知られる。この書は後二條天皇の嘉元四年（德治元年）有名なる東福寺の僧虎關師錬の著せる詩書で、類を以て聚め、群を以て分てるよりこの名あり、また平・上・去の三聲を三層に列擧せるより、三韻一覽或は三重韻等の別名もある。足利時代に詩書として最も行はれたことは、一話一言の印書考などにも見えて居るが、事實諸方に於て夙くより開版せられ、山口にても既に明應二年鏤版のものがある。而して義隆は此等從來の版本を以て滿足せず、更に袖珍本に翻刻して、携帶熟覽に便した。その改版の趣旨は、同書の奥に載せたる義隆の跋文によつて明かである。

三韻一覽、寶於世之書也、凡於遊藝、工於詞之士、未嘗無取焉、信手開卷、三聲之字條次於一紙之上、平仄之異粲然於一目之中、古之人五行並下之說、未必有踰此、不亦快乎、余平素有意於勸人蓄之、故不待其桐梓之朽腐、乃復命工、新其刊矣、庶爲是州廳本乎、然而小其字於舊板、冊子亦短其紙、蓋所以備於勤于熟覽者之藏於巾箱、携於袖間也、若夫與舊本同施敷於世、光飾藝苑、潤色詞林、則所謂經寸之珠不失寶於其形之小者也矣、時天文八年己亥春三月日　正四位下行太宰大貳兼兵部權大輔周防介臣多多良朝臣義隆

以て義隆の斯道に對する熱心努力を知るに足るべく、我が印刷史上特筆すべき事實である。またこの跋文は、義隆の署名あるのみならず、行文修辭の上に多少素人臭味を有する點より觀るも、蓋し義

隆の自作に出でたものであらう。果して然らば、之によりて義隆の漢文學に於ける力量をも窺ひ得ることゝ思ふ。

以上大内氏歴代の經學詩文に關する大概である。然るに義隆を除きては、その事蹟多く傳はらず、縱令分これありといへども、和歌連歌に於けるが如き自作を遺せるものは殆ど見當らぬ。是はその社稷の崩壞、子孫の斷絶に因るところ大なるべけれど、また時代の風潮に從ひ、歌文の易きを撰び、經詩の難きを避けたゝめではあるまいか。文學の中心地たりし京都に於てすら、將軍始め武家の經詩殊に經學に堪能なりし者は多く聞こえぬ。大内氏もまた多分に漏れなかつたことであらう。然るに義隆の如き、よしや其學力に於ては未だ到らざるものありしならんも、專門家にあらずして、前述の如き事蹟を遺し、我が文獻に貢獻せるところ尠からざりしは、最も賞讃に値する。

歴代好學の恩澤に加ふるに、碩學高德の雲集、大陸文明の吸收により、山口を中心とせる大内氏の領内には經詩に關して語るべき尙ほ幾多の事實を傳ふるのである。例へば名高き大内本即ち山口本の版刻である。之には儒釋兩種の別あるが、漢學に關するものにては、前述の聚分韻略の外に、明應二年開版の同書及び明應八年正平版を覆刻せる論語がある。前者の奥には

明應癸丑周陽眞樂軒新鏤板

とあり、後者の末には

今玆一書　夫子之遺言而漢朝諸儒所註解也、寔是五經之輜轄、六藝之喉衿也、天下爲民生者、豈不仰其德矣哉、

明應龍集己未仲龢良日　西周平　武道敬重刊

と刻してある。即ち一は政弘の晩年で、一は義興の治世に當り、何れも山口で出版したものと見える。此等の外尙ほ十八史略・蘇老泉文集等も今に傳はつて居る。當時世に行はれし漢籍とし云へば、儒書には漢唐の古註幷びに朱子の新註、詩書には東坡・杜甫の作、文章には韓退之・柳宗元の著、史書には春秋・左傳・及び史記・漢書等が普通であつたが、大內氏にては前述の史書・文集もまた行はれて居たのである。この大內本に就いては尙ほ後章に於て說くことゝし、更に經詩に關係ある人物に就いて觀察するに、就中、先づ擧ぐべきは、桂菴玄樹と南村梅軒とであらう。

桂菴玄樹は山口の人、永享七年九歲にして上京し、南禪寺に入りて惟肖得巖に依り、嘉吉二年十六歲にして剃髮した。後大內弘幸の寺たる赤間ヶ關永福寺にも居たことは、在明中の詩に「歸夢瓢然落海東、赤城舊院杏花紅、」とあるにて證すべく、（○赤間ヶ關を赤城といへる例は絕海の蕉堅稿にもある。）また周防佐波郡邊にも在りしことは、文明辛卯（○三年）送大醫陳祖田詩中に「客中送客堪爲客、家外尋家未到家、故舊周南若桐問、衰殘白首命如紗、」と見ゆるにて察せられる。應仁元年幕命により遣明使天與淸啓の副として渡海したが、當時明國は禪風衰へて、良師を得るに由なかりしを以て、主として宋學を硏究し、文明五年歸朝して、朱子の新註を傳へた。偶京畿は大亂の最中であつたので、之を避けて石見に行き、後文明八年菊池重朝に招かれて肥後に至り、十年更に島津忠昌の聘に應じて薩摩に入り、桂樹院の開山となつて、大いに宋學の勃興に力めたが、永正五年六月遂に同地に示寂した。桂菴學德一世に高く、歸朝の後始めて朱子の新註によつて訓點を四書に施し、所謂倭點の先驅をなし、また薩摩の國老伊地知重貞と謀つて

大學章句を刊行し、我が國朱子新註開版の嚆矢をなしたことは正に著明の事實である。我が國に於ける經書の解釋は、元は漢唐の註疏に據り、所謂訓詁の學であつたが、鎌倉の中葉、宋國との往來によつて、朱子の新註始めて入り來り、寧一山・虎關・玄慧・圓月・義堂・岐陽等、五山禪苑の碩學を始め、彼の北畠親房の如きも之を味ひ、中にも玄慧は後醍醐天皇に進講せりとさへ傳へられる。されど未だ廣く行はるゝに至らなかつたが、桂菴出づるに及び、薩摩を中心として、大いに新註の普及に貢獻したのである。この後文藝復興期に至り、藤原惺窩その學を薩摩より傳へ、更にその弟子林道春に及んで、遂に幕府の官學となり、やがて江戸時代朱子學の全盛を來すことゝなつた。　れば桂菴の我が經學史上に於ける位置は頗る重要なるものであるが、斯かる人物が大内氏の膝下に出でたることは、大内氏の經學を語る上に注目すべきことゝ思ふ。而も桂菴薩南に在りて望郷の念を斷たず、郷僧の來扣を受けて家郷を夢みしことなど、その著島陰漁唱集中に見え、また義興の時、その衣鉢を承けし月渚永乗が大内氏の使節となりて入明し、爾來義隆の世に至るまで、防薩の間に教學の連絡これありしことを以て觀れば、その間桂菴の關係を閑却することはできぬであらう。

次に桂菴に學べりといふ南村梅軒もまた朱子學に於て特筆すべき人である。梅軒は離明翁とも號す或は周防の人と云ひ或は土佐の人と稱せらるゝが、大内氏實錄に云へるが如く、義隆の御伽衆中に見ゆる有梅軒その人であるかも知れぬ。何れにするも義隆に仕へて山口に居りしことは事實なるべく、同所白石の地にその居住の遺跡を傳へて居た。然るに後山口を去つて土佐に行き、幡多郡弘岡の城主吉良氏に賓となつて、名高き南學の開祖となつた。即ちその後學に谷時中を始め、小倉三省・野中兼

山あり、山崎闇齋またその流を汲みて、別に一派を樹てた。その他、時中の子一齋や、長澤潛軒。大高坂芝山など、何れも南學の錚々たるものである。南學が土佐に興つた朱子學で、我が國近世の文學史上甚だ重要なる學派なることは、今更呶々を費すまでもない。隨つてその濫觴をなせる梅軒の地位もまた頗る重く、その學問經歷を詳にするは必要のことであるが、不幸にして今よりは多くを知ることができぬ。殊に大內氏にありし頃の事蹟に於て然りとする。勿論當時山口の文苑に於ける一大家たりしことは想像せらるゝも、未だ的確なる實證に接せざるは遺憾である。或は風土記に上田纘明の云へるが如く、義隆の朱子新註を朝鮮に求めしは、蓋し梅軒の勸誘に因るところかとも想はるゝが、別に明證のある譯ではない。兎に角、桂菴と云ひ、梅軒と云ひ、本邦朱子學の先覺者が何れも我が大內氏の下に出でゝ、薩摩・土佐の新文化を開拓し、その朱子學の思想が江戸時代の官私學界を風靡して、遂に維新の大業の一原動力とまでなりしことは、正に我が大內文學の誇とすべきである。

桂菴・梅軒の外に、厚東武實崇西に景仰せられて長門東隆寺の開山となれる南嶺子越、山口御堀村乘福寺佛殿の兩牌に銘せる同寺第四世の崇忍、棊山賢仙の法弟にして周防高山寺を再興せる大圓智碩、陶盛政の歸依を受けてその菩提寺なる周防龍文寺の第二世となれる在山曇瑞、竹居正猷の法嗣にして龍文寺及び長門大寧寺を主り、拈香・下炬・序說記・點眼・題賛・偈・詩・書・雜著等を收めたる行卷二冊を遺せる器之爲璠、爲璠の弟子にして同じく大寧・龍文の兩寺を董し、紀事一則の著述ある大菴須益、一千百字の長文にて好箇の史料たる陶弘護肖像の賛を書ける前相國以參周省、須益の法嗣にして大寧寺に住し、後周防瑠璃光寺第二世となれる全巖東純、東純の法嗣にして、瑠璃光寺第三世となれる桃岳瑞

見、龍文寺第五世にして、東純肖像の賛を書げる忠心爲宗、同じく龍文寺第六世にして、陶興房壽像の賛に非凡の文才を留めたる春明師秀、大寧寺第十三世にして、義隆の最後に法縁を結び、瑞雲珠天の法名を授け、更にその菩提所山口龍福寺に移りて、後義隆肖像の賛を書ける異雪慶珠など、防長地方の諸大寺に止住せる高僧名衲は、直接間接に大内氏上下の經學詩文に多少とも關係を有せしことゝ思はれるが、尚ほ前述の趙可庸や朴居士を始め、盛見の時朝鮮に使して一切經を求め歸れる通文通玉・仁方の三僧、長府長福寺の開山虚菴玄寂四世の法孫にして、享德年中明に入り、僧錄司右善世兼翠微山大圓通寺開山如幻南浦に謁して虚菴行錄の撰文を得て歸れる令臣玄浩、南嶺子越の法孫で、同じく享德年中明に入り、天竺靈山雲屋妙衍より南嶺の道行牌文の撰を得て歸れる桂隱元久、寛正二年明に遊ばんと欲して山口に來り、雲谷庵を結んで之に居り、應仁元年桂菴玄樹等と共に入明して居ること三年、再び山口に歸り留まれるが、老後石州に赴き、その終焉を益田氏に託せる畫聖雪舟、大永三年義興の使者として明に入れる山口の商賈宗設、（唐本屋内海氏に關係ある人か、）大永七年明主世宗即位の賀使として渡海せる源松都文、天文七年義隆の專使として朱子新註の五經等を朝鮮に求めし正晛、天文八年義隆の命を承けて明に使せる湖心碩鼎、同年及び天文十六年再度大内氏の爲に入明せる策彦周良、同じく天文八年一切經を求めんがために、義隆の疏及び勘合を得て渡鮮せる嚴島大願寺の僧尊海、東隆寺西堂謙室の弟子にして、天文九年遣明使の員に加はりて入明し、四明山に上りて、五葉院の記を黄鳴鳳に求め歸れる仁溪禪恕の如き、此等支那朝鮮と往復せる者もまた、その僧俗を問はず、必ずや經詩に堪能なりしなるべく、是れまた大内氏の斯學を觀る上に等閑視すべからざる人々である。

第貳卷　第貳號　（一八二）　二三

伊木壽一